

---

# K許周辺の憂鬱

smd33jp

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K許周辺の憂鬱

### 【Nコード】

N59110

### 【作者名】

sm d33jp

### 【あらすじ】

K許周辺の憂鬱について記す

## 第一話

12月のある日のことだった、K許は後輩であるM田と共に会社の更衣室で着替えていた。

「M田君。ラーメンでも食いに行くか？」

「K許先輩いいですか？」M田が発したこの言葉には、奢ってもらっているのですか？の意味が含まれているのだ。

「おいおい〜ワリカンだよ」K許がいつものように笑いながら答えた。

K許とM田は家が近いこともあり、就業後、夕食を共にする機会が多かった。

「じゃ、丸源ラーメンにいきませんか？」

「おお。いいぞ〜」K許が答えた。この言葉は彼の口癖でもあった。

会社から丸源ラーメン屋までは、M田の愛車であるプレオ1台で行くことにした。K許の車は会社の駐車場に置いて行くのも何時ものことだった。

K許のアパートには別の後輩が住んでおり、翌日のその後輩の車に乗せてもらえるため会社で車を置いて帰っても問題がないのである。

ラーメン屋ではお互い、いつものラーメンを頼んだ。

「M田君、餃子もたべようや。餃子は俺が奢るから」K許はとにかく

く気前がいい男である。

「K許先輩いいっすか？」

「おお。いいぞ」口癖であるフレーズでK許は答えた。

二人とも味覚音痴なのか本当に美味しいのか、「美味しい」を連呼する種類の人間である。

その日もM田が何時ものように「美味しい」を連呼していた。しかしいつもと違うことが一つだけあった。

「K許先輩と一緒に食べると特別に」と付け加えたのである。

M田は計算高い人間である。彼は餃子だけでなくラーメンも奢ってもらう魂胆なのであった。

「M田君にそう言われると気分がいいな♪俺が全部奢るわ」

「いいんっすか？」M田が何時もの調子で答えた。

「おお。いいぞ」K許が何時もの口癖で答えた。

K許はとてもシンプルな人間である。そこが彼の魅力であることを彼自身は全く気づいていないが周りにはうすうす気が付いている。

しかしシンプルな人間であるが、同時に漫画にでも出てくるようなドラマチックな男なのである。

M田の思惑通りK許に御馳走になり店を出た。ここまではM田の完璧な筋書き通りである。M田がプレオのハンドルを握り店を出た。帰り道にK許からこんな提案があった。

「M田君、俺の家に上がって話してもしようや」K許もM田も無類の話好きである。

「いいんっすか？」何時もの調子でM田が答えた。

帰り道、いつものように二人はコンビニに寄った。K許は単身赴任であり朝食を買うためである。

「K許さん、さっきご馳走になったので俺が奢ります。それとこれも買いましょ」とM田が言い、そのまま

K許が持っていたジュースとパンを手にとり、M田が選んだ1リットルの炭酸飲料も合せて買った。

M田は1リットルの炭酸飲料はK許の部屋で飲むつもりなのである。

「わりいな、M田君」

「イエイエ。K許先輩と一緒に居れるだけで僕幸せです」M田は打算的な人間でありながら殊更調子者でもある。

K許の部屋は余計なものがなく、目に付くものはラルフローレンの香水ぐらいである。

そしていつものようにK許とM田は他愛もない話を、然も人生を達観した者のように熱く語っていた。

その時である、何の前触れも無くK許の携帯が鳴った。相手は勤務先のT町と言う男である。

会社でK許が責任者であるプロジェクトでトラブルが発生したとのことだった。

「・・・そうか。それなら俺が朝早く行って対処するわ。」そう言っ  
て彼は長い電話を切った。

T町に指示を出したが、残念ながらT町の理解度が足りず自分で対処する事にしたらしい。

「M田君、トラブルがあって明日会社に早く行くから7時に迎えにきてくり」

「はい喜んで♪」M田が居酒屋の店員張りにそう答えた。時計の見たら既に深夜1時を越えていた。

翌朝、M田は約束どおりK許の家に迎えに行った。時間は6時55分である。M田は調子者であるが

時間だけは無駄に守るのである。そして彼のポリシーは5分前行動でもあった。

M田は携帯を取り電話をかけた。かけた相手は無論K許である。

もう何コールしたかな?? そう思いながらM田はK許が電話に出るのを待った。

30秒が過ぎたあたりだろうか、K許が電話に出た。

「おゝM田君、今起きたわゝ」K許は悪びれる様子も無く当たり前のように答えた。

「じゃ準備できるまで待ってますよ」M田はそう答えた。どうやらM田にとってはこの程度は想定範囲らしい。

K許がM田の乗っているプレオの助手席を開けたのはそれから10分少々後のことである。

車に乗り込んですぐに、K許が「M田君これ飲めよ」と言った。彼の手にはペットボトルのジュースがあった。

そのペットボトルを見た瞬間、M田は自分の目を疑った。と同時に眩暈がした。

M田は昨夜から現在までの流れを頭の中で瞬時に整理した。そして心の中で絶叫した。

『そのペットボトルは昨日K許先輩の部屋で飲むつもりで俺が買ってあげた1リットルの炭酸飲料じゃん!』

M田の表情は歪み苦悶していたが、K許はそのことに全く気が付く様子がない。むしろドヤ顔でさえあった。

その事実M田は更に絶望を感じた。

M田は大きく深呼吸をした。それは彼にとって今出来る絶望から現実に戻るための唯一の手段である。

気を落ち着かせてM田はプレオのシフトレバーをDレンジに入れた。正確には入れたつもりだった・・・

アクセルを踏み車を進めようとしたとき、空しくエンジン音だけが静寂の中で響いた。

M田はこのとき既に自分を見失い絶望という深い森に迷い込んでいた。

NからDにレバーを移動させ、どうにか絶望の森から脱出することにM田は全神経を集中させた。

どのくらいだったのだろうか？長い心の闇という森から抜けM田は何とか自分を取り戻しつつあった。

その時M田はふと疑問に思った。なぜK許先輩は僕に寝坊したことを詫びないのだろうか？

そう考えれば考えるほど、絶望から怒りへと徐々に彼の感情は変化を遂げていた。

「K許さん今7時10分じゃないですか」

この言葉はM田感情が確実に絶？から怒りへと変化した確証だった。

またM田自身もこれ以上に嫌味ったらしい言葉はこの世には存在してないことを自覚していた。

と同時にひどく後悔していた。それは先輩に対して嫌味を言う自分の愚かさに対してだった。

「あんなM田君、俺リカバリー良いだろう。早く準備したんだわゝ早く準備するの得意なんだわゝ」

再びM田は絶望のどん底に突き落とされた。  
それはこれから続くであろう深い闇を暗示しているようでもあった。



## 第二話

M田はK許の部屋で膝を抱え、うな垂れていた。『夢であって欲しい』心の中でそう何度もつぶやいた。

10分前まで、まさか自分がこんな事件に巻き込まれるとは想像もしてなかった。

M田は愛車プレオの中で腕時計に目をやった。18時25分である。彼は携帯を取り出し電話した。

「K許さん、アパートの駐車場に到着しましたよ」

「俺まだ準備中だから部屋に上がってくり」

「いいんっすか？」M田が何時もの調子で答えた。

「おお。いいぞ」口癖であるフレーズでK許も何時ものように答えた。

8月のその日は彼らが所属するユニットの飲み会だった。

M田はK許を18時半に迎えに行く約束をしていた。何時もの通り5分前に到着していた。

そして当たり前のようにK許はまだまだ準備中だった。

M田は下戸であり、飲み会があると必ずドライバーとしてK許を迎えに行くのである。

部屋に上がると、K許が上半身裸でタオルの端を持ち、体に付いた

汗を飛ばすように、そのタオルを上半身に叩きつけていた。

M田は床に座りその姿をぼんやり見つめ何気なしに声をかけた

「シャワー浴びた後のK許さん当比社1・5倍ぐらいセクシーですね」

「分かるか？」

「当たり前じゃないですか！オーラが違いますよ」

「おお。いいぞ」口癖であるフレーズでK許は何時ものように答えた。

この会話に特段意味が無いことはお互い承知である。

それでも彼らはこんな感じで終始掛け合いをするのが日課であった。

「K許さん、その香水どこのですか？」

K許は大きいボトルを逆さにして、手のひら一杯に液体を付け上半身全体に馴染ませていた。

「ラルフローレンじゃ」

「流石ですね。舶来品じゃないですか。僕も何時かK許さんのようにかっこよく香水を付けたいです」

「おお。いいぞ」口癖であるフレーズでK許は何時ものように答えた。

M田は何が『いいぞ』なのかを考えないようにしていた。それは考えても答えが見つからないからである。

でもそのフレーズは好きだった。K許には全てをポジティブに捉える能力に長けておりM田はそれに強く惹かれているのである。

手持ち無沙汰だったM田は、先ほどK許が手にとった大きいボトルの香水に目がとまった。

その隣には小さいボトルの香水があった。徐にその小さいボトルを手にとった。

『RALPH LAUREN fragrance』そう記してあった。

こんなに小さいのにいい値段するのだろうとM田は想像した。

次に先ほどK許が使用した大きいボトルを手にした。中身は殆ど使われおり見た目に比べ軽かった。

こんなに大きい香水なら値段も相当なものだろうな・・・そんなことをふと考えた。

その大きなボトルには日本語標記のラベルが貼ってあった。おそらく日本の代理店が親切で貼ったものだろうとM田は思った。

しかしそのラベルを見た瞬間、M田は自分の目を疑った。

『ポロ アフターシェーブ』

見間違えかもしれない。心を落ち着かせるため深呼吸をした後にもう一度ラベルを舐めるように見ることにした。

『ポロ アフターシェーブ アフターシェービンググローション』

そこには残酷にもカタカナでそう記してあった。

嘘だろう・・・M田は背中に今までに体験したことのない寒気が走ったのを感じたと同時に酷く混乱していた。

K許はなぜ全身にアフターシェービンググローションを付けたのか？全身を剃ったのだろうか？

そう考えK許に目をやると剃った形跡は何処にも無かった。

これはK許が自分に仕掛けた罠なのか。でもなぜ？目的は？考えれば考えるほど闇は深くなることを彼は直感した。

「K許さん、これアフターシェービンググローションって書いてます・  
・」M田は震えた声で真正面から質問した。

この質問をしない限りこの闇から抜け出せないことを彼は瞬時に判断し質問したのである。

そしてM田はK許にその大きいボトルを手渡した。

K許はそれを長い時間凝視した。

「M田くん、これ表記間違っているぞ。これ香水じゃ。間違いないぞ。」

その時の彼は一点の曇りない目をしていたのをM田は見逃さなかった。

『ド・ド・ド・・・ど天然』思わず小さな声で囁いた。そして膝を抱え、うな垂れてM田はその場から動けなくなっていた。腕時計は18時35分を指していた。

部屋には理髪店に似た、どこか懐かしい香りが充満していた。

### 第三話

ある日のことだった。

K許は同僚5人と管理棟の食堂で夕食をすませ残業休憩中の暫しの談笑を楽しんでいた。

彼らはT芝セミコンダクター社の半導体エンジニアだった。

当時急速に高まったNANDフラッシュメモリーの旺盛な需要に対応するため定時を過ぎての残業が当たり前になっていた。

「K許さんは学生時代どんな感じでした？ いじめっ子だったんじゃないですか？」 M田がふざけた感じで聞いた。  
実はふざけた振りをしているがM田はK許の全てを知りたがっていた。

彼がそこまでK許に拘る理由は明白だった。考えがシンプルであり全てのことをポジティブに受け止める姿勢。

そしてどんなことがあってもブレない強い心。M田に欠けている大事なもの、それをK許は全て持っているからだ。

「俺な身内には優しいぞ。」そう彼は言った。彼の中で身内とは仲間のことらしい。

「あんな、こんな話があるんだわ」そう言って彼は話を続けた。

「高校3年のとき、クラスメートで元気が無い奴がいたんだわ」  
でなそいつが自衛隊に行くって？ いたんだわ」

でな俺は同級生思いだからな」この時点でM田は少し嫌な予感を感じた。

「そいつは自衛隊だから入隊したら歌を皆の前で歌わされるだろ」

M田の予感的中した。『話が飛躍しすぎている、でもここでそれ

を指摘したところで無駄だ』

なぜ自衛隊だと皆の前で歌を歌わせられるのか・・・凡人には到底発想しえないことである。

しかしM田は話を遮ることなく聞きつづけた。

「でな、そいつを放課後、教室に呼んで皆の前で歌たわせたんだわゝ練習のためにな

だから俺そうとう身内には優しいだわゝ」

そう話したK許は生まれたての赤子のように純真無垢な表情をしていた。

『この人は本気で言っている・・・』M田は愕然とした。

「仮にもし自分の子供がその同級生の立場ならどう思います？」た  
まらず質問した。

しばしの沈黙の後、K許の重い口を開いた。

「そうだな、自分の息子なら俺泣いてしまうわゝ今気が付いたわゝ」

その時、K許の瞳に薄っすら涙が浮かんでいたのを、誰もが見過ごすことは出来なかった。

## 第四話

桜が満開のその日、K許が発起人となり彼が所属するユニット関係者のメンバーと、その家族が二十数名ほど集まり

海蔵川の河川敷にBBQコンロと溢れる程の量の肉、そしてアルコールと子供用のジュースを持ち込んでいた。

午前10時、M田は尊敬の眼差しで一点を見つめていた。その視線は生粋の祭り男であるK許に注がれていた。

M田はK許をなぜ尊敬しているのか？答えは明白である。M田が持ち合わせてない要素をK許が持っているからである。

細かい配慮と人を喜ばせることに努力を厭わないその姿勢、そして何よりも打算が一切無い純真無垢の心を持ち合わせているからである。

M田はその日、5歳の息子と2歳になる娘を連れて来ていた。もちろんK許の計らいである。

ともすれば職場の延長になりかねない行事も、子供がいることによりリラックスした時間になることをK許は分かっていた。

まさにK許の細かい配慮があつてこそそのイベントであり、今回のBBQもK許なしでは有り得ないことだとM田は理解していた。

「あのな、俺BBQ得意なんだわ、大分の頃は何百人も集めてBBQを纏めたんだわ」

なかなか着火しない炭に悪戦苦闘しながらK許はそう語った。その顔は自信に満ち溢れていた。

しかしその言葉とは裏腹にM田はなんとも言えない違和感があった。その違和感には理由はあった。BBQコンロに大きな炭を隙間無く敷いていたからである。

大きな炭にいきなり火をつけようとしても火が付き難いため、まず小さな炭に火をつけるというセオリーに反していた。

「K許さん、小さいのから火をつけましょうか」キャンプが趣味であるM田が提案した。

「あんなM田君、シロートは黙っててくり」俺なBBQ得意なんだわ。大分の頃は何百人も集めてBBQを纏めたんだわ」

M田はその言葉と、とても玄人と思えない火の起こし方、そして周りのいる誰もが自分にフォローを入れてず傍観者になっているのを受け、諦めの表情を浮かべた。

悪戦苦闘の末、一部に火が付いたところで迷うことなくK許はキロ単位でホルモンを網にびっしりと投入した。

その悪夢は数分後に訪れた。その一部に火がついた炭により熱しられたほんの一部のホルモンからの

油が炭に滴り落ちたのである。その油が炭により熱しられ炎となり、その炎で別のホルモンが熱しられ、

さらにホルモンからの油が隣の炭に滴り、隣の炭から大きな炎が出て・・・

この一瞬のプロセスでBBQコンロは見たことも無い大きな大きな炎に包まれたのである。

「本格的なキャンプファイヤーでもここまでの激しい炎はない・・・」誰かが小さな声でつぶやいた。

また退避用に炭を置かない場所を取るのが通常だが、オトコK許はそんなセオリーをも無視して炭を隙間無く敷いていたために炎が出た際にホルモンを退避させる



場所が全く無かったのである。

『このままでは炎が収まることは無い・・・かといってホルモンは表面だけ激しく焦げ、中に全く火が通ってないが・・・』  
そこにいた皆がこの究極の選択を迫られていた。

一瞬の間があり、満を持してB B Qコンロに周辺にいたメンバーが表面だけ激しく焦げ、中に全く火が通ってないホルモンを一斉にB B Qコンロから救出した。

「K許さん、こんなんじゃないですか！」M田が半分切れた表情で文句をいった。

「あんな〜M田君。シロートは黙っててくり〜、みんな食いたいばかりだわ〜だから皆争うようにホルモンとったじゃねえか」

M田はこめかみの奥で鈍く光る何かを感じた。その何かはまだこの時点で気づいていないのである。

子供たちの世話をしていたM田は時計を覗いた。時間は10時55分だった。M田の息子と娘が興奮しながら

「お父さんお父さん お肉食べたい！ほるもん！ほるもん！ぎゅうにく！ぎゅうにく！」と肉を欲していた。

横では相変わらずK許が一人キャンプファイヤーを続けていた。

ふとK許の横にある食材に目をやった。その瞬間背筋に寒気が走った。

驚くことに、さっきまで山のようにあった肉が全て無くなっていたからである。

M田が子供の世話をしている隙にK許はありとあらゆる肉を焼いたのである。

そして11時前で、まさかの締めであるヤキソバに着手していたのである。

それは子供を連れて来る提案をしたK許が、自らの手により鬼のように肉を焼いたため、

子供たちは結局は一口も肉を食べなかったことを意味していた。

「K許さん、どういうことですか！子供たちはお肉一口もたべてないっすよ

そもそも10時からスタートっておかしく不是吗？子供は規則正しく朝の8時に朝食をとっているのですよ

K許さんは朝食とってないから分からないとおもいますがね！」怒りを押し殺してM田が言った。

「あんな、M田君。皆食べたいばっかしなんだわ！俺な皆に上手い肉を食わしてやりてんだわ！」

そう言うK許の目には一点の曇りは無かった。

『ピュ、ピュ　ピュワ過ぎる・・・』心？？中でつぶやいた。同時に諺が浮かんだ。暖簾に腕押し、糠に釘、豆腐に鎚。

しかしここでM田は絶望に浸っている訳に行かな理由があった。

それは子供の昼ご飯としてせめてもヤキソバを確保する事だった。

「K許さん、家の子まだ何も食べてないのです。そして今焼いているキムチヤキソバは辛くて子供が食べれないので、　あそこに残っ

てる最後の3人前のヤキソバはなんとか焼かなくてくれますか、お昼ご飯として12時ぐらいヤキソバ食べさせてあげたいので・・・」  
M田は懇願した。

「おお。いいぞ。12時に子供用のヤキソバだな。俺な子供がすきなんだわ」

その言葉を受けM田は安堵の表情を浮かべた。この後に続く悪夢もしらずに・・・

「な・な・なぜ・・・」M田が震えながらこの言葉を発したのは安堵の表情を浮かべた僅か5分後だった。

M田が目を離した5分間に、K許は12時に約束した最後の3人前ヤキソバの調理に何も臆することなく着手していたのである。

「あんなM田君。I井さんの子供がなヤキソバを食べたいってことで急いで作ってるんだわ」  
再び絶望がM田の心を支配した。

「俺な子供がすきなんだわ」  
K許のぶれない芯の強さをまざまざと見せつけられ、M田は音も無くその場に倒れこんだ。

もちろんこの時点では、この後に起こるあの事件を知るよしも無かった。

M田は絶望した。と同時に父親として子供たちをBBQに連れて来たにも関わらず何も食べさせることが出来なかった 自分の愚かさに苛立ちをおぼえた。

『何か子供たちに食べ物を与えなければ・・・』ふとテーブルを見るとそこにはオニギリがあった。

M田は安堵の表情を浮かべた。

「あんなくM田君 俺な、肉と一緒に米も食べた方がいいと思うんだわ」

でな、材料費を渡すからM田君の嫁さんにオニギリ作ってもらいたいんだわ」

そこにあるオニギリは前日の夜にK許がそう提案したそのオニギリだった。

K許が焼く超ハイペースBBQに参加者が網から肉を救出するのに必死だったために

オニギリは手付かずの状態だった。

そのオニギリを本当に美味しそうに食べる子供たちを見て、M田はなんとも言えない感情が湧き出た。

その感情とは、自分の短絡的な考えに方である。

『子供に食べさせる肉がない！ヤキソバがない！』とか騒いだところで・・・そんなのはどうでもいいことであり、この空間で大人も子供も一緒になって、わいわい騒ぎながら楽しく過ごせるのが何よりの御馳走ではない？』

それを全て分かって上でB B QをリードしているK許の偉大さに改めて気が付いたのである。

もちろんこの時点では、この後に起こるあの事件も知るよしも無かったのである。

翌週の月曜日、昼食を食べ終え、M田は何時も通りP Cに向かい仕事をしていた。

「オニギリ材料費の1000円貰いましたか??」後ろからUが声をかけてきた。

Uは先日のB B Q会計幹事をK許より仰せつかった男である。

「なにになに?」M田が逆に質問した。

「おかしいですね・・・午前中にK許さんが『俺がオニギリ頼んだから直接お礼して材料代の1000円渡しておくわ』と

言っていたのでお金渡したのですが・・・もう一度フォローしておきますね」

Uの言葉を受け、M田は反射的に答えた。

「まて!そんな必要はない」

M田はこう考えたのである。

『あの尊敬するK許先輩はネコババするような人ではない。何か誰にも言えない特別な理由があって渡すのが遅れているだけではないか・・・K許先輩にここでフォローするなんて愚の骨頂だ!』と。

結局その日M田の元に1000円が来ることが無かった。

そしてあくる日も、またあくる日も、何日も何日もM田は待ちつづけた。

しかしM田の手元にその1000円が来ること無かった。

だがM田は全く気にしていなかった。あの1000円は金場町WINGのスロットに消えたのも容易に想像が付く。だがむしろ清々しい気持ちだった。

なぜM田がそう思えたか、理由は簡単である。

『直接礼をして1000円渡したい!』このK許のどこまでも真っ直ぐな気持ちだけで十分じゃないかと。

ともすればメールや電話に頼りがちになる現代において、FACE to FACEを大切にするその姿勢。

漢の中の漢、K許の生き様を間近で感じられる自分自身の幸運に・

・  
そう考えるとM田の目に自然に涙が溢れてた。

自宅のベランダ越から、沈みゆく秋の夕日を眺めながら「まさか・」と不安そうな声でM田が妻に呟いた。  
時計は午後6時10分を指していた。

9月のある日曜日、M田はK許を自宅に招いていた。

K許は単身赴任で大分から、M田は岩手から家族でそれぞれ四日市に来ていおり、

日頃K許は家庭料理を食べることが無いこともありM田が一席設けたのである。

「K許先輩、日頃世話になっているので日曜日には是非我が家で手料理の夕食でもどうですか？」

「おいしいぞ」

「じゃ6時から始めるのでよろしくお願いします」

「おいしいぞ」

わずか2日前にそう快諾したK許だったが6時10分を過ぎても来る気配が無なく、M田は言葉にならない不安に襲われていた。

現代のIT社会では誰もが携帯電話を持っており、御多分に洩れずK許も携帯を所持している。

携帯から電話一本連絡すればいいところ何も無いということは、心不全、心臓発作、交通事故、押し入り強盗など

重大な事件事故に巻き込まれ、K許が携帯を操作できな状況に陥っているのではないかと心配していたのである。

「そんなに心配ならK許さんに電話すればいいじゃん」M田の妻が冷静沈着にそう進言した。

「そうだね、そうしてみる」落ち着きを取り戻したM田がそう答え

た。

M田は携帯を手にとり緊張をほぐす意味で大きく深呼吸をした後、リダイヤルからK許を選び発信した。

1コール、2コール、3コール・・・コール数が増えるたびにM田自身心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

『やっぱり事件事故があつて・・・頼むからK許先輩生きてくれ！』心の中でそう叫んだ。

それは7コール目のことだった。

「おお！M田君か！おお！どうしたどうした？？」

普段からは想像し難いほどのハイテンションでK許が電話に出た。その声を聞いてM田は胸をなでおろした。

「K許さん、家にこないのですか？」M田が携帯電話のMICに向いそう質問した。

「おお！いつでも俺は行けるぞ！」

「こちらはいつでも大丈夫なので待っていますよ」M田はそう答えた。

しかしM田は胸に奥に引っかかる何かを感じた。



『この無駄に高いテンションは居眠りしたのを悟られまいとする幼稚で未熟な演技ではないのか・・・』

M田の感情が不安から疑念に変化した瞬間だった。

M田はK許が来るまで、道路を挟んで建っているサークルKサックスをベランダ越しに眺めていた。

その時である、世界の名車中の名車であり、世界的にはあのベンツのSクラス、BMWの7シリーズ、

アウディのA8シリーズはもとよりロールスロイスのファントム、ブガッティのヴェイロンがベンチマークとして

使用したとかしないと噂されるほどの名車であるクラシックカーの雄、カローラバンがサークルKサックスの駐車場に音もなく滑り込んできたのである。そしてその車内から漁師風のイケメンな男性が出てきて小走りで何かを買っているのを目撃した。

その5分後である。

「ピンポン」

6時30分、静寂に包まれたM田家にそのチャイムは鳴り響いた。

「きもっしゅんきもっしゅん」M田の子供たちは堰を切ったようにK許に駆け寄った。

「これお土産なんだわ」そう言って子供たちにサークルKサックスのビニール袋に入ったお菓子を手渡した。子供たちはジャンプをし両手を使い全身で大喜びを表現した。

そのサークルKサックスのビニール袋に入ったお菓子を見てM田は

なんとも言えない熱く高ぶる感情が湧きあがっていた。 K 許先輩はなんて心遣いができる人なんだと。

30分遅れに関してのコメントも一切無く、本当は居眠りしていたにもかかわらず言い訳を一切せずに堂々としたその態度。 逆にそもそも居眠りなんてしてなかったぞ言わんばかりの振る舞いに人としてのメンタルの強靱さにM田は驚愕した。

そのメンタルの強さは正に現代の日本人に足りない部分であり、その流れに一人立ち向かうK許のその姿勢。 またクラシックカーを愛するその気持ちはまさに温故知新の塊であり、モノを大切にすることの重要さを身を呈して示す懐の深さ。 全ての面で清く正しく真っ直ぐに生きる素晴らしさ。 正にM田にとっての生きる教科書である。

そんなK許振るまいを傍で公私共に経験できる環境に恵まれた自身自身の幸運に思わず涙を浮かべたのであった。

## 第六話

「たまにはいいのうーオートボックス」 K許のその言葉に決して深い意味は無かった。

しかし男としてブレない生き方が宿っていた。

その日彼らは、名古屋のナディアパークそばにある、とあるカフェ

でコーヒーを嗜んでいた。

窓越しから見える人々は、色とりどりのファッションに身を包み皆一様に楽しそうである。

そのカフェは、全席が禁煙で、座席がソファで落ち着いた照明など長居したくなるようなインテリア等

ここ数年で日本でも積極的に展開している、シアトル発祥のコーヒーのチェーン店である。

その店の居心地のよさと、K許の経験から裏付けられた「男とは、仕事とは、人生とは」をテーマに

示唆性に富む話に耳を傾けていたら気づかないうちに店員は閉店の準備をしていた。

「そろそろ出ますか？」M田が言った。

「おお！いいぞ」K許がそう答えた。

カフェの扉を開け栄の夜の町に溶け込もうとしたとき、思いもよらない言葉をM田は耳にした。

「たまにはいいのうーオートボックス」

まさかの出来事だった。

堪らずM田は言った。

「K許さん、看板見てくださいよ！スターボックスですよ！スターボックス！通称スタバですよ！」

「あんなM田君、ボックスは合ってるだろ！半分あってりゃいいだろ！大体お前な普段から細まけんじゃ！」

K許の言葉にM田はただただ立ち尽くすだけだった。

しかしその一言であらゆる事柄に決着をつけれる本当の『力』を持っているK許の人としての大きさを

否応無しに感じ取る瞬間だった。MUSrM田は耳にした。

「たまにはいいのうーオートボックス」

まさかの出来事だった。

堪らずM田は言った。

「K許さん、看板見てくださいよ！スターボックスですよ！スターボックス！通称スタバですよ！」

「あんなM田君、ボックスは合ってるだろ！半分あってりゃいいだろ！大体お前な普段から細まけんじゃ！」

K許の言葉にM田はただただ立ち尽くすだけだった。

しかしその一言であらゆる事柄に決着をつけれる本当の『力』を持っているK許の人としての大きさを

否応無しに感じ取る瞬間だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5911o/>

---

K許周辺の憂鬱

2010年10月30日17時52分発行